

# 構造分析と〈内からの読み〉の方法論的比較研究

—Levi-Strauss と小林秀雄のテキスト理解の可能性と限界—

立命館アジア太平洋大学 清家久美

**【問題の背景と研究目的】**本研究は、小林秀雄の批評における〈内からの読み〉の社会科学における可能性と限界について検討を、言語論的転回においてテキスト論を展開した Levi-Strauss の構造主義的方法との比較においておこなうことを研究目的とする。なお、本研究は M.Weber, I.Wallerstein、平山朝治ら一派が試みようとした社会科学の方法論的限界を見出そうとした問題意識が念頭におかれている。

子安宣邦は「宣長問題とはなにか」において、小林が試みている〈内からの読み〉を「重苦しい印象」として批判したが、この「内側に入ってする読み」、そして小林自身が「方法はたった一つしかなかった。出来るだけ、この人間の内部に入り込み、入り込んだら外に出ない事」という方法の限界はどこにあるのだろうか。社会科学における方法論とは全く相容れないと切り捨てることは簡単だが、果たして、M.Weber の方法論的個人主義／理解社会学との親和性がないとは断言するためには一定の検討が必要であると考えられるし、また文化人類学における C.Geertz 以降の他者理解との近似性は明らかに見え隠れしている。（特に大学教育において、とりわけ「教養的学び」と言われる一派の文脈の視点からは、一蹴することができない近さが存在する。）

P.Ricoeur は、テキストの意味はその背後、すなわち著者の指向性にあるのではなく、テキストの前方、すなわち「公然的でないテキストの指示の側に、テキストが開く世界」の方にある。テキストの読み手としての状況や著者としての状況をこえ、テキストという開かれた世界に「自己投企」することによって自己了解を可能にしてくれる。要するにテキストとは、「自己了解できるような媒体そのもの」であるとし、著書の心的状況を把握しようとするロマン主義の姿勢を強く批判していたが、小林の方法はまさにこのロマン主義の方法に類似しているとも考えられる。

一方、H.Bergson における「直観」は、小林の〈内からの読み〉に類似的方法であり、どうもベルグソンが言うように、「ものの回りをまわる方法」、すなわち「分析」と「ものの中に入る方法」すなわち「直観」という、ものを知るための相容れない二つの方法が存在しているようである。

本研究において、この二つの異なる方法とその出自をそれぞれ把握し、社会科学においてあまり好まれないと考えられる〈内からの読み〉あるいは「直観」の方法の社会科学における可能性と限界を検討することを目的とする。

**【方法と結論】**ここでは、小林同様、その批評や考察をおこなったテキスト論への展開を可能にした構造主義的方法をとりあげる。なぜならば、小林がその方法を試みたのは、宣長の神話理解においてであり、同様に神話理解をテーマとしている Levi-Strauss の構造分析をとりあげることは、テキスト理解、そして神話理解という点においての比較的意義が存すると考えるからである。特に人間における普遍的思考様式を追求するというように、普遍性への志向性をもつという意味において社会科学の方法論として位置づけられる Levi-Strauss の構造分析との違いを検討することは、小林の方法論の可能性と限界をさらに見出し易いと考えるからである。なお、Levi-Strauss は H.Bergson の方法を、J.Sartre との比較において評価しているが、その点も考慮に入れながら考察をおこなう。

## 【参考文献】

- C. Levi-Strauss, 1976/1962, 『野生の思考』. /1992/1988, 『遠近の回想』みすず出版。  
子安宣邦, 1995, 『「宣長問題」とはなにか』青土社。  
小林秀雄, 1977, 『本居宣長』新潮社。  
平山朝治, 1984, 『社会科学を超えて—超歴史的比較と総合の試み』啓明社  
P.Ricoeur, 1978/1971-1977, 『解釈の革新』白水叢書。  
H.Bergson, 1998/1934, 『思想と動くもの』岩波文庫。  
M.Weber, 1998/1904, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫  
I.Wallerstein, 1996/1996, 『社会科学をひらく』./1993/1991『脱社会科学—19世紀パラダイムの限界』藤原書店